

担当編集のお姉さんは、缶詰の夜だけ甘えてくる ——締切と二人の仕事場——

締切で缶詰の仕事場、頼れる年上編集が新人作家の前でだけ崩れていく

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

会社では、誰もが桐生真琴きりゆうを「できる人」だと言う。

担当した新人を何人もデビューさせ、難しい作家を相手に一步も引かず、会議では一番冷静に的を射る。整った黒髪をうしろで一つに結び、銀縁の眼鏡の奥で、いつも先の三手まで読んでいる——そういう、隙のない年上の編集者。

——その人が今、俺の腕のなかで、ほどけた髪を散らして、別人みたいに息を乱している。

深夜の仕事場には、デスクライトの灯りがひとつだけ点っていた。締切に迫われて借りた、編集部近くのマンションの一室。机の上には校正紙の束と、冷めたコーヒーのカップが二つ。窓の外では街灯がにじみ、終電も尽きた通りはひっそりと寝静まっている。原稿のことも、明日の入稿のことも、今だけはどこか遠い世界の話のように思えた。

昼間の真琴を思い出す。打ち合わせの席では、こちらの甘い原稿に容赦なく赤を入れ、「二宮さん、ここは逃げてますよね」と、まっすぐに切り込んでくる。電話口では相

手が大御所でも淡々と渡り合い、後輩の編集には頼られ、上司にも一目置かれている。誰もが「桐生さんは強い」と口を揃える、あの完璧な背筋の伸び方。出版社のフロアを歩く彼女の姿は、いつも凜として、誰の手も借りないように見えた。

その人が、こんなにも頼りなく、こんなにも素直に、年下の自分に身をあずける夜があるなんて、ほんの数か月前の新には、想像もできなかった。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……新くん」

ほどこいた黒髪が、汗ばんだ白い首筋に幾筋も貼りついていて。いつもは眼鏡の奥で屈んでいる目もとが、今は潤んで、頼りなくこちらを見上げてくる。机の隅で伏せられた銀縁の眼鏡が、デスクライトの灯りをによく弾いた。その光だけが、いつもの「桐生さん」の輪郭を、かろうじて思い出させる。

仕事場の壁は薄くて、ときどき隣の部屋の生活音が届く。けれど今、この部屋に満ちた熱を知る者は、どこにもいない。会社の誰も、彼女が頼りにされるぶんだけ独りで抱

えていたものも、この夜のことは何ひとつ知らない。それでいい、と新は思った。この時間は、二人だけのものだ。

昼間の打ち合わせでは、まだ少し他人行儀に「二宮さん」と呼ぶこともある。けれど、こうして二人きりの夜になると、彼女は決まって「新くん」と呼ぶ。たったそれだけの呼び方の違いが、昼と夜の、この人の二つの顔を分けていた。仕事に厳しい背筋の伸びた編集者と、新の腕のなかでだけほどける、年上の恋人。その両方が、まぎれもなく桐生真琴という一人の人だった。

それでも——俺だけが知っている。締切の夜にだけほどける、この人の無防備な顔を。誰よりも頼りにされて、誰にも甘えられなかった人が、今は、こんなにも素直に、こちらへ身を預けてくれている。それが、どうしようもなく誇らしくて、同じだけ、いとおしかった。



——ここから先は製品版でお楽しみください——